

紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第2報)

— 実技演習との関係からみた看護計画記録の分析 —

澤田 和美* 豊島由樹子* 西堀 好恵*
萩 弓枝* 山本 恵子** 木下 幸代*

聖隷クリストファー大学看護学部*
九州看護福祉大学**

Evaluation of Student Learning about the Nursing Process Using Written Simulation in Adult Nursing Course (Part 2)

— Analysis of Nursing Care Plan Records —

Kazumi SAWADA* Yukiko TOYOSHIMA* Yoshie NISHIBORI*
Yumie HAGI* Keiko YAMAMOTO** Sachiyo KISHITA*

Department of Nursing, Seirei Christopher College*
Kyusyu University of Nursing and Social Welfare**

抄 録

成人看護学看護過程演習に実技演習を取り入れることが、学生の学習に影響を及ぼしているかどうかを知るために、学生がグループで立案した看護計画および学生の反応を検討した。結果として、実技演習後に看護計画立案を行ったグループはそうでないグループに比べ、痛みに対する観察に着目していた。看護計画の立案と実技演習のどちらを先に行いたいかの質問には有意差を認めなかった。自由記載から看護過程に実技演習を取り入れることは患者をイメージしやすく効果的だと考えられた。

キーワード：看護過程、実技演習

I. はじめに

看護教育における演習とは、講義で学んだ看護の知識と技術を用いて疑似体験をすることにより、知識の再確認や原理・原則に基づいた技術の活用、看護用具の使い方の学習を目的としている。実技演習においては知識と技術とを統合し、根拠のある看護の技術を学ぶとともに、看護をする者、される者の両者の立場に立つ機会を設ければ、相手の反応を確かめつつ援助をすることができ、かつ対象者の立場に立つといった学習をする機会にもなる。

成人看護学では3年次生を対象に紙上事例を用いた演習を行っている(第1報参照)。この一連の演習では、一つの事例を検討することおよび実技演習において患者役を疑似体験することにより、問題を持った患者の状態や、看護援助を

行って問題を解決された患者の状態をイメージしやすくなることを意図している。

そこで、本稿では実技演習が学生の学習や洞察力の深まりに反映され、効果を及ぼしているかどうかを知ることを目的として、学生がグループで行った看護計画の分析および学生の反応から看護計画立案と実技演習との学習の順序性が学習効果に与える影響を検討した。

II. 研究方法

1. データの収集

表1・表2に示す学習目標・行動目標のもとに、肺癌で手術を受ける成人患者の紙上事例を用いて1グループ4~5名のグループ演習を行った。看護計画立案は「手術後の呼吸器合併症予防」に対する計画立案に的を絞り、長期目標と

表1 看護過程演習の学習目標

<p>【学習目標】</p> <ol style="list-style-type: none">1. 健康障害を持つ成人期の対象者に対し、看護していく上で必要な情報が理解できる。2. 対象者の状態・状況を看護の視点で明確にすることができる。3. 対象者の問題を明確にし、問題を解決するための方法を根拠を元に立案することができる。4. 対象者の問題解決に向けて看護実践ができる。

表2 看護過程演習の行動目標

<p>【学習目標】</p> <ol style="list-style-type: none">1) 周手術期の対象者の情報収集と解釈・分析・統合ができる。2) 看護上の問題を導き、解決に向け、対象者にあった具体的な計画立案ができる。<ol style="list-style-type: none">①手術後の呼吸器合併症予防のための援助が記述できる。<ul style="list-style-type: none">・手術後の呼吸状態の観察項目が記述できる。・具体的な排痰法、呼吸訓練方法が記述できる。3) 呼吸器合併症予防のための看護援助を実践することができる。<ol style="list-style-type: none">①呼吸訓練の目的・方法を対象者にわかりやすく説明することができる。②対象者の状態に応じた効果的な呼吸訓練を行うことができる。<ul style="list-style-type: none">・対象者の呼吸状態を観察できる。・対象者に応じた排痰法を指導できる。・対象者に応じた呼吸訓練法を指導できる。③患者役として呼吸訓練を体験する。

短期目標はあらかじめ教員が設定して呼吸器合併症に対する援助方法を具体的に立案させた。

まず、情報収集と解釈・分析・統合から「看護上の問題・ニーズ」を抽出し、原因・誘因・症状など関連状況を含め簡潔に記載するよう求めた。次に、「期待される結果」として対象者を主語に達成可能な状況を記載させた。最後に、「期待される結果」を充足するための具体的な手段としての具体策を、O-P（observation plan：観察計画）、T-P（treatment plan：看護治療・ケア計画）、E-P（educational plan：教育計画）の3つの視点から記載するよう説明した。少なくとも、手術後の呼吸状態の観察項目および排痰法、呼吸訓練方法の記載を求めた。

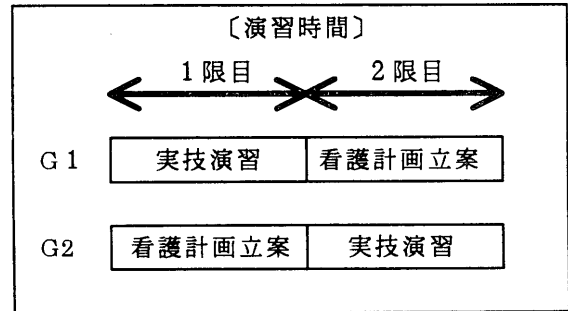
さらに、実技演習（1コマ・2時間）として看護計画立案を行ったグループで1ベッドを使用し、対象者の状態に応じた効果的な呼吸訓練を行うことができるように看護師と患者役割を決めて演習を行った。看護師役の学生は、①呼吸状態の観察、②排痰法を指導、③呼吸訓練法の指導を実施した。患者役の学生に対しては、術後の状況を想定し、役に徹しながら、患者役として呼吸訓練を体験するよう説明した。

2. データの分析

実技演習を行った後に看護計画立案を行うグループ（G1）と看護計画立案を先に行った後に実技演習を行うグループ（G2）について看護計画内容および具体策の記載内容の数と質を比較した。G1は看護計画立案を行った2限目終了後に看護計画用紙を回収した。G2は1限目に看護計画立案を行い、2限目に実技演習を行うが、実技演習後に看護計画の追加をしない状態で看護計画用紙を回収した。

さらに、演習終了後の自己評価調査と同時に調査票を配付し、学生に看護計画立案と実技演

図1 演技演習と看護計画立案の順序



習のどちらを先に行った方がよりよい学習を行えるか選択してもらい、理由の記述を求めた。

学生が実際に行った看護計画立案と実技演習の順序と調査結果から導き出された学生がよいと考える順序性の関係から、実技演習の効果を探索した。データの分析に当たっては、統計パッケージspss9.0J for Windowsを使用した。記述統計と独立性の検定を行った。自由記載は学生の演習に対する意見としてまとめた。

Ⅲ. 結果

1. 看護計画内容と演習の順序性

1) 「看護上の問題・ニーズ」の抽出

呼吸器合併症の危険因子として学習してきた①肺の切除による呼吸面積の減少、②麻酔・挿管の影響、③喫煙習慣について、④排痰訓練の不足、⑤呼吸訓練の不足が抽出できているかをG1とG2（各15グループ）とで比較した。表3のように①肺の切除による呼吸面積の減少は、G1で8グループ、G2で7グループ、②麻酔・挿管の影響では、G1、G2とも6グループ、③喫煙習慣については、G1で4グループ、G2で5グループが記述していた。④排痰訓練の不足はG1で13グループ、G2で11グループ、⑤呼吸訓練の不足はG1の14グループ、G2の12グループ、合計26グループとほとんどのグループが問題として取り

挙げていた。5つの看護上の問題のどの項目においても、抽出グループ数でG1とG2の間に有意な差はみられなかった。

2) 具体策の記載方法・内容

看護計画用紙の記載方法をO-P、T-P、E-Pの3つに分けるよう説明した。G1は15グループすべてがO-P、T-P、E-Pに分けて記載していたが、G2の数グループではO-P、T-P、E-Pに分けていなかった。

O-Pには手術後の呼吸状態の観察項目を必ず記載するよう説明した。記録内容を見るとa.呼吸状態の観察に関する項目のほかに、b.気管分泌物に関する観察項目、c.呼吸・排痰訓練に伴う痛みに関する観察項目、d.呼吸・排痰の訓練状況と理解度に関する観察項目と4つに大別できた。G1とG2を比較すると表4に示すように、a.呼吸状態の観察項目はほとんどのグループが記載していた。c.呼吸・排痰訓練に伴う痛みに関する観察項目はG1で9グループと6割のグループが抽出していたが、G2で1グループのみであった。d.呼吸・排痰訓練状況と理解度に関する観察項目ではG1で4グループ、G2で3グループの記載があった。

表3 具体策における抽出内容のグループ数比較

	G1 (15グループ)	G2 (15グループ)	合計
観察項目(O-P)			
呼吸状態	14	12	26
気管分泌物	13	9	22
呼吸・排痰訓練に伴う痛み	9	1	10
呼吸・排痰訓練の状態と理解度	4	3	7
看護治療・ケア項目(T-P)			
呼吸状態	12	15	27
気管分泌物	13	14	27
呼吸・排痰訓練に伴う痛み	4	4	8
呼吸・排痰訓練の状態と理解度	5	5	10
教育項目(E-P)			
呼吸訓練の方法と必要性	11	12	23
排痰訓練の方法と必要性	14	12	26
呼吸・排痰訓練に伴う痛みについて	2	0	2

T-Pでは行動目標に挙げた、排痰法、呼吸訓練法をほとんどのグループが記載していた。G2ではO-Pに呼吸状態や気管分泌物の状態の観察項目がないグループにおいても呼吸・排痰の看護援助項目を挙げており、記録上で観察と援助の関係性がない記述もみられた。E-PではT-Pで挙げた看護援助の根拠や留意点を記載していた。T-P、E-Pの記載内容の質はG1とG2を比較しても目立った差は見られなかった。

2. 調査結果からみた演習の順序性

122名中111名からの回答が得られた。G1が55名、G2が56名とほぼ同数であった。

看護計画立案は実技演習の前後どちらが良いかの選択を求めた。実技演習後に看護計画立案を行ったG1では、実際に行った順序を選択した者28名(50.9%)、実技演習より先に看護計画立案を行うほうが良いと回答した者18名(32.7%)、どちらともいえないが9名(16.4%)であった。先に看護計画立案を行ったG2では実際に行った看護計画立案を先に行うことを選択した者36名(64.3%)、実技後に看護計画立案と回答した者12名(21.4%)、どちらともいえないが8名(14.3%)であった。全体的に見ると、看護計画立案を実技演習の前に行いたいと答えた者は54名(48.6%)、実技演習の後が良いと答えた者は40名(36.0%)であり、有意な差は見られなかった。

自由記載では、実技演習の後に看護計画立案

表4 実技演習と看護計画立案の順序

	看護計画立案の時期			合計
	実技前	実技後	どちらともいえない	
G1	18名 32.7%	28名 50.9%	9名 16.4%	55名 100%
G2	36名 64.3%	12名 21.4%	8名 14.3%	56名 100%
合計	54名 48.6%	40名 36.0%	17名 15.3%	111名 100%

を行うほうが効果的と答えた者は“イメージがしっかりでき、患者の気持ちもわかるから”、“頭だけではなく、実際に体を動かすことで、具体的になってよくわかる”など、表現は異なっているがほとんどの者が演習経験により患者や看護援助のイメージが湧き、看護計画立案を行いやすいと記述していた。

実技演習より先に看護計画立案を行うことを選択した者は“計画立案をしてからのほうが実技演習を理解しやすい”、“計画立案して実行したほうが後から計画を訂正できると思う”などと答えていた。

学生が実際に行った看護計画立案と実技演習の順序に対して、学生がどのように考えているかを知るために独立性の検定を行った。「学生が実際に行った実技演習と看護計画立案の順序と学生が良いと思う実技演習と看護計画立案の順序は互いに独立しているという」仮説のもとに χ^2 検定を行い、有意確率1%以下で有意差が認められた。

これらの結果から、学生の行った演習の順序が調査用紙の回答と関係があると考えられ、学生は実際に行った順序をよいと考えている傾向がうかがえた。

IV. 考察

1. 看護計画内容からみた実技演習の効果

1) 看護上の問題とニーズの抽出

各グループがどの看護上の問題を抽出したかにより学習効果を判断した。「排痰訓練の不足と呼吸訓練の不足」は呼吸器合併症の援助を考慮する際に問題として見だしやすいためか、30グループ中それぞれ24グループ、26グループで抽出されていた。喫煙習慣については気管分泌物の増加の観点から重要な項目であるが記述

が少なかった。看護援助としての禁煙指導は、呼吸器合併症の予防において長期におよぶ援助であるため、手術後で急性期の問題にあがりにくかったと考える。

各項目ともG1・G2間で記載グループ数に有意差がないことから、看護上の問題の抽出に関しては実技演習の関わりが少ないと考えられた。看護上の問題の抽出は、情報を解釈・分析・統合した結果として現れるため、実技演習との関係は強くなかったと推測される。

2) 具体策の立案

看護計画を記載するときにO-P、T-P、E-Pの3つに分けるよう説明したが、G2中の数グループで分けていなかった。“計画を3つの側面に分けて立案する方法”はPOSの考えから由来しており、成人看護学演習では、3つの側面から計画を立てる訓練を行うことを奨励している。O-P、T-P、E-P3つの側面のどの側面からでも患者に応じた立案しやすい順序で計画を書いてよいが、問題に対して的確で根拠のある援助を行うことが大切である。実技演習では看護援助を行うときのポイントとして、まず患者の状態を観察し、看護援助が必要であるか査定した後、患者にこれから行う援助内容の説明を行い、援助を行うという順序性を重視している。その結果、先に実技演習を行ったG1の15グループすべてにおいて観察、援助方法、指導方法という観点で看護計画を行うことに反映したと思われる。

具体策のO-Pで痛みに関する観察項目では、G2が1グループであるのに対し、G1では9グループと大きな差があった。これは実技演習で患者・看護者役を行って看護計画を立案したことから手術後の傷は痛いという疑似体験をすることで、観察項目として抽出されやすくなったのではないかと考える。G2のグループのいくつかにおいてO-Pに呼吸状態や気管分泌物の状態の観

察項目に記載がないにもかかわらず、T-Pにそれらの看護援助項目を挙げていることをからも、実技演習を行ってから看護計画立案を行う方が看護援助と観察項目との間に根拠に基づいた看護援助という関係性を見出していると考えられる。

2. 演習の順序からみた実技演習の効果

今回、実技演習と看護計画立案を1時限ずつ交替で行っており、実技演習より前に看護計画立案を行うグループと後に行うグループができた。今回の調査では実技演習の前に看護計画立案を行う方が良いという回答のほうが多かったが、両者の間に有意な差は見られなかった。

一般的には、看護計画立案を行った後に実技演習を行うことは、患者の状態を理解してから患者に沿った援助を行うために効果的と考えられている。今回の調査でも“計画を行って演習をすることにより（計画の）評価ができる”という回答があり、実技演習の前に計画を評価し演習後に追加することで効果的な学習ができていた。

しかし、“実技演習を行った方が患者のイメージを思い浮かべやすい”という意見があり、看護援助経験の少ない学生にとっては、紙上事例のみで具体的な看護計画立案を行うことを困難と感じていることがわかった。実技演習で経験した後に看護計画を立案するという順序も、経験の少ない学生にとっては患者の状態が具体的にイメージできるという点で効果的と考えられる。

以上のことから、実技演習の順序性にかかわ

らず、看護過程の演習に実技演習を取り入れることは、学生の理解を深めるために意義があるものと考えられる。

V. 結論

今回、紙上事例を用いた看護過程演習に実技演習を組み入れる方法を試み、看護過程における実技演習の効果を見た。

実技演習の前に看護計画立案を行った学生と後に計画立案を行った学生の看護計画の内容を比較した結果、実技演習後に看護計画立案を行ったグループはそうでないグループに比べ、紙面では現れにくい、痛みに対する観察に着目している傾向にあった。また、“実技演習を行ってから看護計画立案を行ったほうが患者のイメージを思い浮かべやすい”という回答が多くみられ、看護援助経験の少ない学生にとって、実技演習を看護過程の演習に組み入れてことは効果的だと考えられた。

参考文献

- 1) 藤岡完治、堀喜久子、小野敏子編集 (1999) わかる授業をつくる看護教育技法. pp.169-184, 医学書院, 東京.
- 2) 五十嵐節監修 (1996) 学内演習の手引き. pp.46-58, 照林社, 東京.
- 3) 中木高夫 (1991) POSをナースに. pp.131-143, 医学書院, 東京.
- 4) 黒田裕子 (2000) 看護過程の教え方. pp.15-61, 医学書院, 東京.